福島みずほと市民の政治スクール 2012　in 永田町　第 2 回　（2012. 3. 15）

田中　優子さん「未来のための江戸学」　概要

［目次］

１．ブータンに行ってきました
1-1. ブータンの GNH がめざすもの
1-2. GNH の 4 つの柱と 9 つの分野
1-3. ブータンと江戸時代との比較

２．グローバリズムの中の江戸
2-1. グローバリズムのもたす不幸
2-2. グローバリゼーションの中で出現した江戸時代

最後に
電気のない時代
経世済民

１．ブータンに行ってきました

1-1. ブータンの GNH がめざすもの

今日は、まず「自立」の話から始めます。私は環境に関心のあるグループでブータンに行って来たのですが、ブータンは今、自立をしようとしているのです。ブータンは GNH、国民総幸福量で知られていますが、その GNH の前提、あるいは目的が、国の自立です。1960 年代からブータンには開発のために主にインドから多額の援助金が支払われていましたが、まずこれを断ることから始めました。ブータンの行政では、省の上に委員会があって、GNH 委員会、環境委員会などの委員会が策定したことを省が守らなければならない、とりわけ GNH は全ての省と全ての政治家が守らなければならない、かなり強い縛りです。GNH という判断基準に政策やその結果が合うかどうかを細かくチェックしています。GNH は単なる観念ではなく政策そのもので、これを守らなければ自立はできないということなのです。自立は、経済的自立だけでなく文化的自立でもあります。ブータンは、インドと中国という大国に囲まれた小国（面積は九州の約 90%）ですが、このグローバリズムの中で生き抜くために自らの思想を通していくという意思が非常にはっきりしています。また、それを外国に向けて常にアピールするという姿勢が鮮明です。20 年前くらいから五カ年計画を積み上げてきていますが、細かく数値目標を立てて分析し、達成されていないものも含めて広く公開しています（http://www.grossnationalhappiness.com/）。

1-2. GNH の 4 つの柱と 9 つの分野

GNH 政策には 4 つの柱があります。

①は持続可能で公正な社会的経済的発展。経済的発展の前に、持続可能と公正があります。持続可能というのは、この国にとって大変重要なことです。発展とは、教育や、道路・電気など遠隔地のインフラ整備です。電気は、山地の急流を活かした水力発電で、インドに売るくらいの量を発電しています。

②は文化の保全と促進で、GNH という目標があるから文化なのです。人が幸福に、心に安定を持って暮らすには、急速に文化を変えるのは非常に危険であるという判断です。宗教的習慣、宗教の多様性、民族衣装なども保全の対象です。民族衣装、特に布の問題は産業の問題でもあり、文化は生活を成り立たせる経済の基本と結びつ

いてもいます。日本でも明治以降、多くのものの貿易を自由化してしまったために壊滅した産業はとてもたくさんあって、木綿産業はその筆頭でした。
③は環境の保全で、なんと国土の 60%は自然林でなくてはならないとされています。日本にはほとんど自然林はなく、二次林です。戦国時代に築城・城下町建設・鉱山開発で大量の伐採が行われ、これによる洪水などに対処するために江戸時代に保全政策をとり、その後育林に向かいます。ただし、自然林と違って、育成された二次林は人が手を入れ続けないとなりません。こうした先進国の教訓をブータンは学んでいます。で、国土の 50%以上が自然保護地域になっています。自然保護が必要なのは、人間は自然の一部だからです。放射能や DNA 組み換えなどは、人間がその一部として生きている自然を破壊する問題です。
④は「good　governance」で、民主的な文化を作り出すこと、言論の自由、差別からの自由、メディアの信頼性、政治腐敗の撲滅、をめざしています。
この 4 つが柱で、この GNH 実現の 9 分野が、①心の安寧、②生活水準、③good　governance、④健康、⑤教育、⑥コミュニティの活力、⑦文化の多様性と弾力性、⑧時間の配分、⑨生態（エコロジー）の弾力性ですが、この 9 つの中でブータンの特徴は①と⑥と⑦と⑧の 4 つだとはっきり言っています。時間の配分とは、瞑想や家族や、自分の幸せのための時間をとることです。これらを更に細目に分けて調査分析しています。今、問題なのは⑥だということでした。都市化の進展による問題で、その最大のものはゴミ問題だそうです。江戸時代もそうでしたが、ゴミは収集して埋め立てに、排泄物も川に流すのを禁止して回収して肥料に、と解決しました。けれども、今はそういう循環に乗らないプラスチックゴミがブータンでも問題となっています。

1-3. ブータンと江戸時代との比較

江戸時代日本とブータンの共通点としては、
・グローバリズムのただなかで経済的・文化的「自立」を実現し、継続したこと、
・安全に生きるための環境保全を重要視し、持続可能社会を運営していたこと、
・「仁政」とか「経世済民」という、国の目標と理念を持っていたこと、
・governance の最重要課題が中央集権ではなく、地域と国の関係であったこと、
が、あげられると思います。
地域と国の関係については、ブータンは山が多いためにそれぞれの地域の独立性が高く、現実に文化も多様です。江戸時代の日本では、法律も経済も藩単位で、幕府の中央集権ではなかったのです。

※　映像によるブータン紹介
・県のお祭り。お祭りの場は県庁舎であると同時に僧院でもある。正装の民族衣装。
・農村の棚田。畜産の様子。いったんは農薬や化学肥料も入ったが、現在はオーガニックへの転換をめざしている。建築材料も有機物を入れた泥煉瓦。
・農家の壁に一般的な魔除けの絵。人間の持つ身体的エネルギーを表象している。
・伝統文化の中心になる、広い仏間
・伝統医療センター。漢方医と西洋医の両立。医療の場に、祈りの場、瞑想の場もある。
などなど

２．グローバリズムの中の江戸

2-1. グローバリズムのもたす不幸

岩波ジュニア新書で『グローバリズムの中の江戸』という本を 5 月に刊行予定です。昨年暮れのテレビ番組のサンデーモーニングでもグローバリズムがテーマで、お話をしました。グローバリズムにはインターネットなどの利点もありますが、不幸を呼び込む性質もあります。先進国で何をやっているのかとか、どういう商品があるの

かとかいうことを知る、あるいはそれがどっと流れ込んでくると、自分達の文化は遅れている、自分達の文化はおかしい、不幸だと思うようになります。で、この遅れた不幸な状態から脱出するためにはものを買わなくちゃならないということになる。そして自給自足の生活を捨てて、ものを買う、そのための現金収入を求める生活になり、そして、お金がないこと自体を不幸と感じるようになります。日本は明治に入ったときと戦後の二回、それを経験しています。明治に入ったときには、江戸時代を恥ずかしい、遅れていると思い、江戸時代を全て否定して西欧になろうとしました。真っ先に着物を捨てたのは天皇でした。天皇は着物を着ないで軍服を着たというのは日本の近代を象徴しています。人々も無理して洋服を着るというところからどんどん自分の文化を捨ててゆき、日本は不幸だという循環の中で幸福を求めて、幸福になるためにはお金だという話になって、そして今日に至るわけです。同じことは戦後にも起こりました。今でもアジアの諸国で同じことが起こっています。ですからブータンはそれに気がつきました。ブータンの人たちはとても誇り高いですけれども、それは誇りを保っていないと自立が保てないからです。しかし、日本の場合にはすでにもう経験してきた、そういう誇りを捨ててきたという経緯があります。

2-2. グローバリゼーションの中で出現した江戸時代

私はグローバリゼーションの話は、コロンブスのエスパニョーラ島上陸の 1492 年から始めます。コロンブスはもともとは日本の金・銀を求めていたのですが、「新大陸」にたどりつき、その後、スペイン人はインディオやアフリカの黒人の奴隷労働を用いて南米の鉱山開発・収奪を行います。その頃、ポルトガルはインド、マラッカから日本をめざしてやってきており、日本では銀山開発が始まります。日本はその銀で中国の生糸･絹織物・陶磁器などを輸入していました。当時、ヨーロッパも日本も世界の技術の中心である中国とインドを狙っていたのです。しかし、太平洋航路が開かれて南米の銀が中国に支払われるようになり、日本は国際競争力を失います。その頃、ポルトガルが銃をアジアに持ち込み、秀吉は中国とインドを手に入れるために、大量に銃を生産してまず朝鮮に出兵します。この慶長の役は日本とアジアの歴史の大きな転換点でした。日本はここで負けますが、この戦争は朝鮮半島の農地を荒らし、朝鮮を援助した中国に経済的損害をもたらし、大量の鉄を使って銃を生産し、国内生産できない火薬を輸入していた日本は自分自身も大きな経済的損失をこうむりました。このようにして行き詰った日本を何とかするために出現した時代、作られた時代が江戸時代です。江戸時代の成立はグローバリズムの中で考えないとわからないのです。拡大主義に突っ走っていた日本は、ここで縮小の選択をします。徳川幕府はコストの嵩む武器（鉄砲）と戦争とをやめます。内戦への逆戻りを止めるために、まだ強大な力を持つ藩と国との関係を、参勤交代制度によって調整します。朝鮮通信使制度、琉球使節の制度、アイヌの挨拶行事という制度で外交関係も初めてまともに纏め上げる。特に一番大切だったのが朝鮮半島との関係修復です。拡大主義からの縮小と同時に、江戸時代は自立をめざします。インドの木綿や中国・朝鮮の陶磁器・生薬などは輸入を縮小してサンプルのみ買い、国内で綿花栽培、木綿・陶磁器・生薬などの生産技術を少しずつ確立していきます。各藩でもその土地にあった生産開発を奨励し、国内で自給できるものを作ってゆく、これはブータンのやり方と非常によく似ています。日本の江戸時代は、中国・インドという大国との関係の中で自立した技術、自立した生産体系を育てた、自立時代と呼ぶのが一番ふさわしいと、私は思っています。鎖国というのは、明治以降に定着した言葉ですが、これは開国した素晴らしい近代日本、鎖国している暗い江戸時代という対照を作り上げることによって、遅れた江戸時代を切り捨てるためのものだったのです。

最後に

電気のない時代

電気がないということに対して、私たちはすごく恐怖感を覚えます。けれども、江戸時代は電気が全然ない中で、職人の技術が非常に育つ自立時代を作り上げました。江戸時代の人は夜は行灯で読書をしました。現在の本は行灯の灯りでは読めませんが、江戸時代の本は読めるのです。暑さ寒さには、風通しのいい家、真綿を入れた袷な

どで対応していました。何かがなくても、それに合わせた生活を打ち立てればいいのだと思います。

経世済民

経済のもとの言葉は経世済民、人々全員が幸せになることです。これはお金のことではありません。人が救われることです。その経済の元の意味に戻り、その目標をうちたてなければならない。私たちはもっと全体のバランスを考えなければならないし、循環という考え方、右肩上がりではない考え方で、私たちは新しい時代を作っていくことができるはずです。私は原子力発電は核発電と呼ぶべき、核問題の一つと考えています。核廃絶と同時に脱原発はやはりすぐにしなければならないし、自然破壊とともに私たちが滅びる道を選んではならないと思います。電気が少なくなる時代、代替エネルギーがあるからいいという話ではなく、そうではなく、この暮らしを変えるために考えていかなければならないことがまだ山積みだと思います。

【当文書に関する注意事項】

- 当文書は、各スクールの講師の了承を得て「福島みずほと市民の政治スクール」運営チームにより作成されたものであり、文責および著作権は「福島みずほと市民の政治スクール」運営チームにあります。当文書の無断転載を禁じます。
- 当文書中に引用された各スクール講師のオリジナル資料の著作権は、各スクール講師にあります。

Copyright © 2012 by「福島みずほと市民の政治スクール」運営チーム All rights reserved.